

練馬郷土史研究会会報

第395号

―豊島氏関係史料を読み直す―

豊島刑部少輔信満の刃傷事件とその背景(八) 伊藤 一美

5 信満の「一門一族と家臣たち」

信満の「一門一族とその家臣らについてみていく。この点に関して、直接の子孫である豊嶋美王磨氏の私家版『豊嶋少輔明重』の巻末に掲載の「豊嶋明重関係史料」集が大いに参考となる。以下略号として「同」「関係史料」として使用する。

なお、本論考では幕府編纂の『断家譜』に基づき「豊嶋信満」と記してきたが、御子孫家では「豊嶋明重」の名称を使用している。

武蔵国久良岐郡富岡(横浜市金沢区富岡)の富岡八幡宮蔵、慶長十五年八月吉祥棟札によれば(『同』富岡関係史料(4)、「旦那源朝臣豊

嶋主膳正明重(花押)、当郷代官中山弥兵衛督

「嫡子豊嶋宮松丸(花押)、当社禰宜佐野彦十郎

胤清」とあり、この時期の当主は「豊嶋主膳正

明重」でその継承者は「嫡子豊嶋宮松丸」であっ

た。「宮松丸」とは、豊嶋美王磨氏伝来系図から

明重の子とも「継重」であり、寛永八年八月十

四日、十四歳にて切腹「家名断絶」と記載する。

法名「直入玄心禅公子」、江戸芝の青松寺に葬

られたという。

また信満には、「御代官平岡勘三郎良時妻」と

なった女がいた(『同』「断家譜」5。刃傷関係史

料(13)。「御代官とは地元富岡郷の代官と考え

てよいだろう。恐らくは、刃傷事件で豊嶋家断

絶により代官とも離縁となり、改めて関東代官

の伊奈忠次の養女というかたちで配慮がなされ、

伊奈氏家臣の田口勘兵衛に再嫁させたのではな

いだろうか(同)。この時期、徳川家康から武蔵

富岡郷が知行地として与えられていたことが伺

われる。『新編武蔵風土記稿』巻76久良岐郡

4では、文禄四年に豊嶋信満に与えられたと記

す。現地管理は代官の中山弥兵衛督何某で、旗

本知行地の一つとなっていた。

この慶長十五年棟札の願文に特に「老母当病平

癒」とこれに依て東より西の社に移り奉る」と

記されていることから、豊嶋信満はこの慶長十

高札場

〇九月例会 九月二十六日(木)

豊島氏初期本拠地と飛鳥山

源頼朝宿陣地を巡る歴史散歩

葛城明彦氏の案内で上中里駅から出発、蟬坂を

通って平塚神社へ、豊島氏の本拠平塚城跡で、前

九年役後に八幡太郎義家と弟義綱、後三年役後

には義家と義光兄弟が立ち寄り、仏像と鎧の下賜が

あったという。その鎧を埋めた塚が神社社殿背後

の「甲冑塚」で、この塚が平らであったので「平塚

」の地名が生じた。境内の「平塚亭」は、浅見光彦シ

リーズで有名。

豊島国衛跡という御殿前遺跡から西が原一里塚、

七社神社と前裏の遺跡を見て旧渋谷庭園から飛鳥

山へ。「博物館」を見学し休憩。船津翁、飛鳥山の

碑などを見てモノレールで王子駅前へ。その後王

子神社、音無溪谷、音無橋をまわって金剛寺。源

頼朝が石橋山の敗戦後安房へ渡って立ち直り、上

総から下総を経て滝野川に布陣した。金剛寺一帯

はその本陣だったという。

近くの松橋弁天洞窟は江戸期の行楽地で王子七

滝などがあり、弁天様は弘法大師作で、頼朝が太

刀を奉納したという。現在は石神井川の護岸工事

で消滅した。

ここから王子駅前に戻り十二時半ごろ解散した。

天候にも恵まれ充実の半日であった。

当日の参加者 二十一名(うち非会員四名)

安保陽一 上原菊枝 大河勝正 入谷加代子

鎌田茂男 栗原末江 島崎幸夫 柿島香也子

鈴木 寛 鈴木孝明 中平和成 寺田千香子

三井俊一 八巻孝夫 葛城明彦 中島正比古

船渡しげ子

1月例会及び7年度総会

1月25日(土) 午後2時

会場：生涯学習センター

練馬区豊玉北6-9

TEL 03-3991-1667

講演：「日本人の苗字(姓)を考える
―その歴史と謎を考える―」

講師：八巻孝夫氏(会員、城郭研究家)

参加費：300円

ほかに令和7年度

年会費 2,000円お願いします

お誘いあわせ
参加ください